

介護「誇りとやりがい事例集」作りに取り組んで

埼玉・医療生協さいたま生活協同組合

本部事業部 岡村 和夫（前老人保健施設みぬま事務長）
保健看護課 佐藤 史子（前老人保健施設みぬま介護長）



はじめに

2006～2007年ごろ、「老人保健施設みぬま」は慢性的な介護職不足に悩まされていました。世間でいう3Kが原因なのでしょうか。当時の介護職の離職率は常勤16%、パート52%、全体で31%と全国平均より高く、退職理由調査から驚くことに先輩職員たちの態度、言動によるものも少なくありませんでした。過酷な介護労働の実態と相次ぐ退職が職員の平常心を奪い、団結して問題解決にあたるという力を職場から奪い去っていたのです。

私たちは管理者として、焦りとともに心が痛みました。これは現場ではなく管理者の問題として認識し、職場に元気がないと職員は辞め、働く職員が輝いていないと介護現場に入ってくる若者はいない、この流れを断つ「辞めない職場づくり」の一環として「誇りとやりがい事例集」作りに取り組みました。

介護における諸問題の根源は、自公政権の社会保障費削減、介護切り捨て政策にあり、「介護ウエーブ」のたたかい抜きに問題解決はありません。そのような中でも「私たちは負けないぞ！」と心の中で拳を握り締めている職員も多くいました。

1. 事例集作りの目的

「安心した老後を送りたい」というのは、すべての国民の願いです。誰もが必要な介護サービスを利用できる「介護の社会化」の実現と、それを支える介護職員が、専門性を高め、生きいきと働き続けられる環境整備が急務です。

しかし今、地域の介護は崩壊の危機にさらされ、相次ぐ報酬引き下げによる経営難、厳しさを増す現場の介護労働と深刻な人手不足の状況の中、マスコ

ミは介護労働のつらさや大変さばかりを取り上げ、そのマイナスイメージは、今の深刻な日本の介護の状況を悪化させるばかりです。そんな中、私たちは、介護労働が、高い専門性と大きなやりがいのある魅力的で、プロとしての誇りの持てる仕事であることを社会的にアピールしていくことで、「介護の仕事っていいものだ！」ということを広く知ってもらい、今の状況を変えていきたいと思っています。

そして、「赤字で疲弊している介護職に、やりがいは誰かに与えてもらうものではないと気づいてもらい、日々の仕事の中からやりがいを感じ、誇りを持って仕事をつくっていくことができる集団をつくっていきたいと思っていました。改めて自分の仕事に向き合い、なにを『誇り』に仕事をしているのか、考え共有することで元気を出していきたいと思い、事例集を作成したいと考えました」と当時の責任者は語ってくれました。

2. 事例集作成の取り組み

介護職部会が論議して取り組み、一番大変だったのは原稿集めです。忙しい中、期日までに提出したのは10人足らずでした。その原稿も、一回書いてOKという人は少なく、何回かの話し合いを重ねて、本当の自分の気持ち、思いが文章に表現されてきました。今思えば、このプロセスが職員に考える力を養い、完成した事例集が多く人の感動を呼び覚ますことにつながっていると思います。

「老人保健施設みぬま」では、「みぬまのこころ」という理念を実践していますが、多くの職員から、「言われていることは分かるが理想が高すぎる」「こんなことできない」等の発言もありました。しかし、

事例集に著された職員の介護実践の姿は「みぬまのこころ」につながるものばかりでした。

事例集は今年4月に第2版が発行され、介護職47人の事例と付属資料が掲載されています。

3. 取り組みを通して学んだこと

まず、事例集作成の目的を理解してもらうのが大変で、「日々の忙しい仕事の合間になぜやらなくてはいけないのか」「意図はわかるけれども現場はそれどころじゃない…」といった意見が出されました。

「特別なこと」ではなく、日々の実践の中にたくさんある「やりがいに目を向けていく」という視点に変えていく作業を共有していくことは大変でした。

しかし、完成した冊子をみんなと読んだとき、最後まで事例を書くことに同意しなかった職員が「感動した。書いてよかった」と言ってくれました。その理由を、「日々一緒に仕事をしている職員の考えていることや介護観を知らなかった。大切にしている思いを理解でき、その職員の行動の背景が見えた。また一緒にがんばりたい」と話してくれました。

事例を書くことで、自分がなぜこの仕事を続けているのか、介護の仕事への思いの整理ができました。また、現在と今後の自分自身の役割を描き、それらを全うするには、これから自分に何が必要なのかを考える契機になり、たくさんの気づきがありました。やはり、どんなに大変な中でも、客観的に自分の仕事を見つめて、他の職員と共有することで得られるパワーはとても大きいものだと実感しました。

学校訪問では、先生方の育てたいと思っている介護職の姿が事例集の中に見て取れ、大きな共感を得ることができ、現場からしか発信できないメッセージを伝えていく大きさを学びました。

「介護が大変」という記事は、介護職でない多くの人が書いていますが、「楽しい!」「うれしい!」というメッセージは介護職しか発信できません。介護職として、社会にメッセージを伝えていく責任があると学びました。

当法人はサービス形態は様々ですが、多くの介護職が働いています。結集し、行動を起こせる集団であり、一人ひとりが介護の仕事の場面で様々なことを感じ、思い、考え、様々な経験を通して成長して

いることを実感しました。

4. 事例集作りが起こした変化

事例を書き上げた当事者たちが一番感動し、元気になりました。そして、介護職が大切にしていることを他職種と共有することで、事業所全体の団結に大きな力を發揮しました。

医師、看護師、事務系管理者などの他職種からの「介護職ってすごいね」という言葉に、自分たちの存在を改めて感じることができました。困難であった新卒介護職確保も新入職員に介護観を語り、めざす姿を共有することができ、確実に就職に結びついています。

課題であった離職率も2008年度で常勤11%、パート42%、全体で26%と下がってきました。常勤の新卒介護職の退職は3年間発生していません。

私はこの事例集を読み、「こんなにすごい職員たちと一緒に仕事をしている」ことに感動しました。

5. 今後の課題

事例集をさらに普及し、介護を志す方に勇気と元気を発信し、介護の仕事の魅力をもっと伝えていくとともに、職員同士で読後感想会等を開催し、お互いの介護観を理解しあい、深め合い、質の向上に役立てていきたいと思います。日々の仕事の中のやりがいを見つけ、大変な中でそこだわって仕事をつくっていく、さらには行政に訴えていくことのできる、介護の本質を貫ける介護職集団になっていきたいと思います。

おわりに

この事例集を通して、介護の仕事がとてもやりがいのあることを伝えることができたと思います。

現行の介護保険制度は、利用者からも、働く介護職、事業運営者から見ても問題が山積しています。特に介護職員が生き生きと働ける職場・環境づくりは急務です。引き続き「介護ウエーブ」の大きな波を幾重にも積み上げ、介護の社会化をめざして全国の皆さんと力を合わせて奮闘したいと思います。